

聖書：第二サムエル記 19章 11～23節

説教：和解と赦し

はじめに

戦争を始めるのは易しいが、戦争を終わらせて平和に導くことは大変難しいと言われます。たとえ力づくで相手をねじ伏せたとしても、負けた方は相手に対して激しい憎しみやうらみの思いが残っています。その思いが残っている限り、一旦は戦いが止んだとしても、いつかまた新たな戦争が始まっていきます。どのうしたら世界から戦争やテロがなくなるのか。みな悩んでいます。でも答えは驚くほど簡単です。敵と本当の和解ができたならこの地上から戦争はなくなる。多くの人がそのことを認めています。しかしそうできないでいます。ダビデもこの問題に直面しました。彼はどうしていったのかを見ていきます。

1 和解

1) ダビデとユダ族との間にあったしこり

ダビデの息子であったアブシャロムは、イスラエルの王となるために父を殺そうと刃向かい、父と子の間で戦争が始まります。結局、アブシャロムは戦いのさなかに命を落とし、ダビデの側の勝利となります。さて問題はそこからです。戦争は終わっても、負けた側には複雑な感情のしこりが残っています。負けた側とは、アブシャロムを支持していた人たちで、ここではユダ族と呼ばれている人たちです。

戦争が始まる前まで、ダビデはエルサレムに自分の住まいを定めていました。ところがある日、アブシャロムが攻めてきたという知らせを聴いてエルサレムを脱出し、荒野に逃

げ延びたます。いま戦争が終わりました。ダビデは堂々と自分の住まいがあるエルサレムに戻ればよいはずですが。しかしダビデはすぐには戻らない。今言ったように、感情のしこりが残っています。このことを解決しておかないとまたすぐに衝突が起きてしまいます。

2) ダビデからの和解の申し出

そこでダビデはユダ族の人たちに二つの提案しました。11節の終わりからです。「あなたがたは、なぜ王をその王宮に連れ戻すのをためらっているのか。あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ。そらなのに、なぜ王を連れ戻すのをためらっているのか。」

ダビデもユダ族の出身です。同じ血のつながっているものなのだから、今まではいろいろあったけれど、もういちど和解してやり直そうと、まずダビデの方から和解の申し出をします。

もし皆さんがユダ族の立場ならダビデの提案をどう受けとめるでしょう。「ダビデのことばを信用して良いか。」まず疑うはずで。なぜか。仮に日本の戦国時代にこんな問題が起きたならどうなりますか。王に刃向かった者は厳しい処罰を受けるでしょう。領地は取り上げられ、お家取りつぶし。周りの者への見せしめのためにも非常に厳しい処罰を与えるのが常套手段です。

ユダ族の人たちもそのことを考えました。甘い言葉で誘っておいて、後になってから厳しい処罰をするのかもしれない。そう考える

と、ダビデの提案をととても素直には受けとめることができません。

3) 敵であったアマサを将軍として迎える

ダビデも多くの経験を積んでいますから、そうなることは織り込み済みです。そこで二つ目の提案をします。13節。「またアマサにもこう言わなければならない。『あなたは、私の骨肉ではないか。もしあなたが、ヨアブに代わってこれからいつまでも、私の将軍にならないなら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。』」

アマサとは、ダビデの親戚のひとりで、今回の戦いではアブシャロムの側につき、アブシャロムの軍隊を指揮していた重要人物です。ということは、ダビデはどんな提案したことになるのか。ついきのうまで敵として戦っていた相手の将軍を、自分の軍隊の将軍に迎えようと言うのです。ただ迎えるのではありません。「ヨアブに代わって」とあります。ヨアブは、ダビデの右腕としてほとんどすべてのことを取り仕切ってきた人です。そのヨアブを降ろして、代わりにアマサを将軍に据える。常識ではありえないような大胆な提案です。なぜヨアブを降格させるのか。そこにも大きなテーマが隠されているのですが、きょうは触れません。とにかくこの提案があったことで、ユダ族の人たちはダビデのことばかりではないとわかり、ダビデを迎える決心をします。このようにしてダビデとユダ族の間にあった壁は取り払われていきます。

2 赦し

1) シムイが迎えに出て来る

しかしなおまだ、別の壁が残っていました。

それが今日の箇所が登場するシムイとツイバのことです。このふたりがともにサウルの家との関係者であったこと覚えておいてください。きょうはそのうちのシムイに注目します。

ダビデはヨルダン川の東側に逃れておりましたから、宮殿のあるエルサレムに戻るためには、川を渡らなければなりません。先月行かせていただいたイスラエル旅行で、実際にヨルダン川を見てきました。今は水の流れはそれほど多くはなく小さな川に過ぎません。しかし、ダビデの時代はやはりそれなりの大きさの川幅があったようです。王さまが川を渡るとき、わざわざ迎えに出て来ます。シムイもそのひとりでした。彼はこう言っています。19節。「わが君。どうか私の咎を罰しないでください。王さまが、エルサレムから出て行かれた日に、しもべが犯した咎を、思い出さないでください。王さま。心に留めないでください。」

シムイがしたことは、16章5節以降にはつきりと書かれています。ダビデがアブシャロムの手から逃れてエルサレムを脱出して荒野に逃れようとした旅の途中のことでした。そこへシムイがやってきて、ダビデにこんなことを叫んだ。「出て行け、出て行け。血まみれの男。よこしまな者。」そして、ダビデが息子に追われて逃げる羽目になったのは、罰が当たったからだとも叫びます。なぜそんなことを言うのか。

2) ダビデとサウル家との間にあったしこり

そのあたりの事情を知るには、初代イスラエルの王であったサウルが死んだときにまでさかのぼる必要があります。王が死んだことで、だれがその後を継ぐのか人々は騒ぎ出します。サウルはベニヤミン族の出でしたか

ら、ベニヤミン族の人々は当然自分たちの親戚から跡継ぎを出すべきだと考えます。ところが、そんな思惑とは別にユダ族のダビデが王となります。そのため、しばらくダビデとベニヤミン族との間でいさか이가続き、ダビデもそのことでは相当苦労したようです。それでもとにかく何とかおさめたつもりでした。ところが、あれからもう四十年も経っているのに、やっぱりあのときのしこりはベニヤミンの人たちの間でくすぶっています。ダビデがエルサレムを脱出するとき、サウル家に奉公していたシムイが追いかけてきて、その恨みつらみをダビデにぶつけていった。シムイが「私の咎」と言っているのはそのことです。

3) 腹を立てるアビシャイ

シムイとダビデのやりとりをすぐそばで見っていたのはアビシャイという人物。シムイがダビデに悪態をついていたときも、彼もそばにいましたからいきさつは全部わかっています。その彼がこう言います。21節。「シムイは、主に油注がれた方をのろったので、そのために死に値するものではありませんか。」

あれほどひどいことをダビデにしておきながら、今になってのこのこ出てきて、あの罪は赦してくださいと言う。アビシャイはこれを聞いて腹が立ってしようがありません。シムイは、「赦してください」と言える立場なのか。いや、おまえなど生きていて資格はない。アビシャイはそんなふう息巻きました。

4) 「あなたを殺さない」

ダビデはどう判断したか。アビシャイがど

んなんに不満に思おうとも、このことはあなたには関係がないことである。きょうは和解と赦しの日なのだから、人が殺されてはならないと言って、シムイに「あなたを殺さない」と誓います。一国の王さまともなると、これくらいの太っ腹なところ見せない駄目だ、という話でしょうか。

3 神

1) 和解の申し出

みなさんはシムイのことばを聞いてどう思われましたか。ダビデが力をなくして、貧しい姿になると、「罰当たり」とののしり、ダビデがまた力を得てイスラエルの王として戻ろうとすると、今度は手のひらを返すようにして「このしもべの咎を思い出さないでください」としゃーしゃーと言う。アビシャイが腹を立てる気持ちはよくわかる。

しかしよく考えると、私たちが神に対してやったことはまさにこれと同じことではなかったのか。十字架につるされていたイエスを見て、「血まみれの男。よこしまな者。人を救うというのなら、まず自分を救ってみろ」とののしっていたような者ではないですか。それがあるとき、困ったからと言うので「神さま、あの罪を赦してください」と言う。なんとも身勝手な話です。そんなことをしていたのが私たちです。せも、それが私たちがしたことでした。

神はどうされたのでしょうか。「あなたの罪は赦さない。おまえは死に値する。」もしそう言われたのなら、だれも救われる人はいなかったでしょう。しかし神は、私たちを救うために来られました。いったいどのようにして救うのでしょうか。

そもそも、私たちはなぜ神の前に出て行く

ことができたのですか。神に逆らった者は厳しく処罰すると言われていたのなら、だれも前に出られなかったでしょう。私たちが何も考えずに出られるのには、ちゃんとした理由があった。神があらかじめこんなふうに応じ出てくださいましたからです。「あなたはわたしの子どもではないか。あなたはわたしの仲間なのだから、わたしのところに戻って来なさい。」

たいと願います。

2) 神の子が降りて来てくださり、罪人となられる

それでも神が本当に怒らずに私たちの罪を赦してくれるのか。とてもこのことばだけでは信じられない。そこで神はもっとはっきりとわかるよう二つ目の提案をしてくださいました。

ダビデは、ユダ族の人々と和解しようとしたとき何をしたか。もっとも右腕として頼っていたヨアブを將軍の座からおろして、敵であったアマサを迎えようとした。それは何を教えているか。父なる神は私たちと和解しようとしたとき何をしたのか。ご自身がもっとも愛しておられたひとり子イエス・キリスト。この方は神であられたのに、神の座から降りられてを罪人として十字架でさばきをお受けになりました。そのようにして、私たちを今度は神の子どもとして迎えようとしてくださった。それを見たとき、神が私たち罪人と和解をしようとしているのは嘘ではない。本当なのだとわかるようになった。

神に対して罪を犯した者がどうして神と和解ができるのか。当たり前のことと思っていたかもしれませんが、よく見ると、神はこのように配慮をしてくださっていた。その恵みの中で私たちは救われていることを覚え